

第1章 田主丸の虫追い祭り 祭りの見どころと流れ



稲の害虫を追いかける虫追いは全国各地に残っていますが、田主丸の虫追いは全国で唯一と言われる独特な形式で行われます。

現在、J Aにじ田主丸地区青年部主催で3年ごとに開催されます。今年、令和7(2025)年で第17回目を迎えますが、これは江戸時代から昭和30年代まで行われた地元の行事を復活したものです。

そのため、久留米市『筑後川遺産』の登録第2号「田主丸・祭りの賑わう里」地域をつなぐSDGSにも、虫追い祭りは代表的な地元行事として紹介されています。(裏表紙に「筑後川遺産」の説明があります。)



見どころ

◎高さ3mの人形、長さ5mの大馬
舞い手は6本の竹柱で、3mの高さにある武者人形を人形浄瑠璃(じょうるり)のように操ります。赤い鎧(よろい)の人形が「手塚(てづか)」、または「テッカントロー」、黒の人形は「実盛(さねもり)」または「サネモリムシ」と呼ばれます。

大馬は実盛の馬です。長さ4.8m、高さ2.5m、幅1.8m。20数人で担ぎますが、数人は馬の下にもぐりこみます。

これほど大きな人形と馬が登場する虫追いは、全国でも田主丸でしか見られません。

◎祭りを支えるさまざまな役
人形が息を合せて演技できるのは「ドン・ドン・キャンキャン」と鳴る鐘・太鼓のおかげです。

人形のそばで赤白の采配(さいはい)を上下させる2人は「指揮棒」と言われ人形の踊りや合戦開始など、全てを取り仕切る役で、J Aにじ田主丸地区青年部長とパイオニアクラブ会長が務めます。

横断幕や幟(のぼり)旗を持つ人は「旗持ち」です。昔は、ご神事の祝詞(のりと)に出てくる文を幟に書きました。だから幟は単なる飾りではないのです。

◎一条乱れぬ人形踊り

鐘太鼓に合わせて2体の人形が踊ります。舞い手は腰を深く落とすと、次は立ち上がり重い竹柱を上に掲げます。その動きを2体の人形で完璧に揃えます。

近寄って刀を合わせる場面では、両者の動きとタイミングが揃わないと、刀の刃

を合わせられません。きれいに刀合わせすると、大きな拍手が送られます。

実盛が大馬に乗って手塚と刀合わせする特別な型もあるので、お見逃しなく。

◎人形の柱も折れる激しい合戦

2体の人形は、激しく激突して合戦もします。その激しさは、背中を支える竹が折れるほど。見る人を大いに興奮させてくれます。人形が地面に倒れると、大馬が突進し舞い手を蹴散らします。最後に「祝いましょ!」と舞い手が筑後三本締めして、合戦に区切りがつけます。

午前は、J Aにじ「耳納(みのう)の里」や町内の福祉・保育施設を回ります。耳納の里では、大馬に人を乗せます。

午後は、田主丸中央商店街を二手に分かれて人形が練り歩き、途中ではったり出会うと合戦が勃発。商店街そばの月読神社でも土煙を上げての合戦に。とても間近で見られるおすすめのスポットです。

◎夜、川の中で大合戦

最も祭りが盛り上がるのは、夜、巨瀬川(こせがわ)に入っての大合戦です。

舞い手は、ここが最後とばかり目一杯はじけますから、いろいろなハプニングも起こります。蹴散らした川面の水しぶきが照明に照らされて、それがまた合戦を美しく演出します。大馬に実盛や来賓者が乗ることも。2か所でナイアガラ花火が流れ落ちる中、合戦はクライマックスを迎えます。

会場は、J R久大本線田主丸駅北側の中央橋、その上流(東)側です。